

# 1. キリスト教会の起源

しばしば世間では、イエスがキリスト教会を創設したとか、その原始的で素朴な教会をパウロが神学的に論理づけることによって、後のローマ・カトリック教会に通じる変形を行ったというような俗説が、まことしやかに語られます。そのような非神学的な作り話で引き合いに出される聖書のテキストとして、「わたしはこの岩の上に教会を建てよ」(マタ 16:18)というイエスの言葉や、パウロの「教会はキリストの体であり」(エフェ 1:23)、人は「律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって」(ガラ 2:16)洗礼を受けて、この教会に「接ぎ木され」(ロマ 11:17)、神の国の「相続人」(ロマ 8:17)となるというような論述があります。

そのような人々は原初のキリスト教の姿を、単純に“イエスに従う人々”の素朴な群れであって、未だ組織化された団体ではなかったという空想を描いているに過ぎません。

確かに、最初期のキリスト信者の群れが“イエスに従う人々”であったことは当然のことです。しかしその詳細は、現代の感覚で言う有象無象の大衆ではありませんでした。

① 彼らは(生まれながらにせよ、改宗者であるにせよ)、すでにイスラエル共同体に属する人々であって、契約の民、約束を受け継ぐ民でありました。(ロマ 9:4、エフェ 2:11f 参照)

② 彼らは約束のメシア(マタ 1:21、ルカ 2:25-38)、“任職されたメシア”(マコ 1:11)に従った人々であって、したがって弟子たちはすでに新しいイスラエルの民であり(マタ 5:1-12)、特に十二人については「新しい世界になり、人の子が栄光の座に座るとき、……イスラエルの十二部族を治めることになる」(マタ 19:28、ルカ 22:30)人々でありました。彼らはイエスの受難以前にすでに、その名が天に書き記されていることを喜ぶことが出来る(ルカ 10:20)、来るべきメシアの国の民として選ばれた少数者(マタ 22:14)であることを知っていました。

主の受難と復活の後、すなわちイエスが「栄光に入った」(ルカ 24:26)後にも、彼らはメシアの国の民であり続けました。復活された主が「大いなる力と栄光を帯びて」(マタ 24:30)再臨されるその日に、そのことが明らかになると彼らは信じていました。

初期のキリスト教会が自らを、新しいイスラエル、真のイスラエル、旧約の預言者たちによって語られていた「残りの者」(イザ 10:21f、ミカ 5:2 他)、すなわちメシアに属する共同体であると自覚するようになったのは、論争と迫害によりユダヤ教の会堂から分離独立するようになって行ったことの結果でありました。

教会はその出発点においては、ユダヤ教の一つの“分派”でありました。彼らは“キリストを信じるユダヤ教徒”であって、“ユダヤ教からキリスト教に改宗した人々”ではありませんでした。つまり、ナザレのイエスを、特に復活して栄光に入られたイエスをイスラエルの真のメシアであると認めた人々の群れであって、その他の点では、彼らは自らを“正しく信仰深いユダヤ教徒”であると理解していました(ルカ 2:25、24:53、使 3:1)。

このように、その教会理解は当時のパレスチナのユダヤ教の信仰そのものを反映しているのです。ただその理解は終末論的なものでありました。彼らはイスラエルとは別に、もう一つの共同体を創設したのではありませんでした。彼らは、真のイスラエルに属する群れであり、しかもそれが今や終末的な共同体であると理解したのです。当時の教会は、キリストの復活とその最終的な来臨との間の期間は、非常に短いものと期待していました。

私たちが新約聖書から読み取ることが出来る教会理解には、次の三つの特徴があります。

① 終末論的方向性。 ② ユダヤ教的背景と、初期共同体のユダヤ教的性格。 ③ キリスト教の弁証方法が、当時のヘレニズム的宗教概念と表現へと移行して行く姿。

このように、新約聖書における教会理解は高度な教義であって、決して素朴なイエスのファンクラブのようなものではなかったのです。

教会は終末的な神の民であって、今や霊の支配下にある真のイスラエル(ロマ 8:9-17)が、古き「肉によるイスラエル」(I コリ 10:18)に取って代わりました。それはアブラハムの子孫であるとか、割礼や律法の遵守によってではなくて、信仰によって義とされた者たちの共同体(ガラ 2:16)でありました。

このような教会理解を、パウロは異邦人教会にとってあたかも当然の共通理解として述べています。このことからその教義は、パウロより遙か以前に起源している、つまり最初期のヘレニスト(ギリシア語を話すユダヤ人 / 使 6:1 参照)のクリスチャンたち――パレスチナだけでなくアンティオキヤ(使 11:20-26 参照)の教会などで、ユダヤ教への改宗を経ずに直説福音を聞いて信じるようになった人々――に共通の教会理解であったと推測するのが妥当なのです。

イエスが教会を創設したとか、キリスト教という宗教を開いたという俗説は、聖書神学を本格的に学んだことのない人々の間で、今日でもしばしば語られることがあります。しかし、キリスト教会には誕生日はないのです。なぜならそれは、古い契約に続くもの、昔から“神のイスラエル”として知られていたものの正統な継続だからです。一世紀のクリスチャンに“イエスが教会をお建てになったのはいつですか？”と尋ねたら、恐らく彼らはその質問の意味自体を理解出来なかったことでしょう。

「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよ」(マタ 16:18)というイエスの言葉は、マタイ福音書だけにあるもので、恐らく著者はイエスの復活の日を念頭に置いて――ペトロはその出来事の最初の証人であった(I コリ 15:4f)――理解し、その当時には未だ教会は成立していなかったという見解を述べたのでした。しかしイエスの復活は教会の誕生日ではなくて、古き肉によるイスラエルから新しい霊によるイスラエルへの大いなる移行が実現した、かけがえのない段階でありました。

## 2. カトリック教会の形成

新約聖書に含まれている諸文書はすべて、一世紀末までにはすでに成立していましたが、それらが(その中に最終的に採用されなかった他の諸文書から明確に区別されて)結集され、すべての教会の普遍的な規範である正典として認められるようになるまでには、さらにほぼ100年が必要であったという事実を、多くのキリスト信者は知らずにいるようです。

おそらくその原因は、主としてプロテスタント陣営からの間違っただけのカトリック非難に由来しています。最初の教会は、使2章に書かれている聖霊降臨の日に誕生したとの主張から、多くのプロテスタント信者はあたかもこの一世紀の使徒時代の教会が新約の諸文書を産み出しただけではなく、それを正典としてすでに所有していたと空想しました。そして二世紀になると、この初期の教会が徐々に堕落・衰退してカトリックの時代になり、“聖書のみ、信仰のみ、万人祭司”という新約聖書の基本原理から離れてしまったと主張したのです。しかしそれは、単に非歴史的な理解であるばかりでなく、誤った理解であると言わねばなりません。

私たちが知っている堅固な組織としてのカトリック教会は、使徒後教父の時代を経てほぼ三世紀初頭には出来上がるのですが、実はこれが歴史におけるキリスト教会の最初の誕生でありました。言い換えるなら、最初の教会はこのとき初めて、“カトリック教会として”誕生したのです。ですから、使徒後の時代である一世紀末からのほぼ100年間を、キリスト教のカトリック化の段階(組織としての教会誕生に至る前段階)として理解することは間違っていない。教会の聖職位階制度と、特に司教職による使徒的伝承の維持(使徒継承)という教理が徐々に明確になることによって、初めて教会の根本的統一が実現したからです。そしてこのカトリック教会において初めて、旧約聖書正典と全く同じ権威を持つ新約聖書正典というものの範囲が、最終的に決定されました。

ですから、そこに至る以前の時代の教会がすでに、あたかも新約聖書に基づく均一で定型化された組織であったかのように空想することは、全くの誤りなのです。おそらくペトロ的な教会やパウロ的な教会が存在したように、彼ら以外の者たちによって創立された教会も存在しました。少なくとも一世紀末頃のあの膨大な異邦人教会が“パウロ主義”の上に建てられていた、などと仮定することは非歴史的な誤謬に過ぎません。カトリック教会の成立を、パウロ主義からの後退という意味で堕落と呼んだプロテスタントの人々の主張は、実は見当外れな放言でありました。

一世紀末の教父であるローマのクレメンヌスも、アンティオキアのイグナティウスも、すでに使徒継承と聖職位階制度について主張し、特に後者は最初に“カトリック(普遍的)”という表現を教会に付したことで有名ですが、しかし実際に“ローマの司教に首位権を委ねるカトリック教会”という統一に至るまでには、マルキオン派の改革およびモンタヌス派の反動を退けることに代表される困難な歴史の経過を経なければなりません。その頃のローマ帝国には、ローマ、アレクサンドリア、アンティオキアという有力な三大都市があって、後に四世紀に開かれたニカイア会議の時代になってもなお、この三つの都市の司教を指して、“三つの首位権”に言及しています。二つ以上の“普遍的教会”が存在するというのは言葉の矛盾であり、ですから、それゆえ諸信条における“カトリック”という呼称は、事実上“非分派的”あるいは“正統的”という意味で使われたのです。現代のプロテスタント教会で使われている使徒信条が“聖なる公同の教会”という翻訳を採用しているのは、実は非歴史的な解釈によることなのです。

プロテスタントの人々は従来、カトリック教会の聖職位階制度を口を極めて非難して来ましたが、そして、あたかも聖書さえ学ばば、そこにはすでに真の教会のあるべき姿を定義出来るような、確定した公同の教理が存在するという幻想を抱いて来ましたが、しかし、次章で述べるように新約聖書は、組織としての教会誕生以前の多様な傾向や主義主張を豊富に伝えているのであって、当時のすべての教会が一致して「公に言い表している信仰」(ヘブ4:14)、ましてやその“すべて”を収録しているわけではありません。

福音の使徒的伝承が、先ず父なる神とイエスから使徒たちへ、そしてその使徒たちの後継者である司教たちへと受け継がれて維持され、それによって福音の浅薄化や新解釈、さらには完全な歪曲化の危険から守られたという、草創期の聖職位階制度の功績を無視することは正しくないのです。使徒後の時代の教父たちについて少しでも学ぶなら、現代の信仰者である私たちは、彼らがその当時使徒的伝承の維持に傾けた熱意と情熱に感激すると共に、深い感謝の念を抱かないではいけないと思います。

ただし、そのことは現代に至る歴史の教会において、聖職位階にある人々が実際に使徒的福音の守護者として、また宣教者として、そのあるべき役割をいつも十分に果たして来た、あるいは現在も果たしているだろうかということとは、区別して考えられなければなりません。代々のローマ教皇や司教たちの脱線や無能ぶりを非難することによって、カトリック教会草創期の教父たちを軽視したり無視することが間違っているのと同様に、現代の信徒が自ら学ぶ努力を省略して、多くの司教たちとその配下の司祭たち(教会憲章28)の無能な指導を無批判に受け入れることも、決して適切なことではないと私は考えていますが、いかがでしょうか。

### 3. 原始教会の職制

初期の教会の職制は、ほぼ当時のユダヤ教からそのまま受け継いだものでありました。使徒たちは復活の主から遣わされた者であり、また必要に応じて地方教会のために派遣されました(使 8:14, 11:22-30, 13:3, 15:33 他)。

使 6:1-6 でに登場する“奉仕者(後の助祭)”の任命は、著者の意図では使徒たちが「祈りと御言葉の奉仕に専念する」ためであったことになっています。しかし、彼らが実際には「日々の食事の分配」だけを仕事としたのではなかったことは明らかです。ステファノは奇跡を行い、(ユダヤ教の)会堂で議論したり福音を説教しました。フィリポはサマリアの町の会堂で、ガザへ下る道で、アソトで、カイサリアに至る町々で説教しました。この七人は、使 21:8 では福音宣教者と呼ばれているように、エルサレム教会での単純な奉仕者ではなかったことが分かります。

使 15 章には“使徒と長老たち”が登場しています。長老というのはユダヤ人社会ではどこにも存在し、会堂での礼拝の世話をする、文字通り年長の人々でありました。会堂での説教(内容は律法の説明)をするのは信徒や律法学者、時には祭司であったと思われる。“先生(ラビ)”という呼び名は尊称であって、律法を学んでいる人という程度の意味しかなく、祭司ではありませんでした。ですから、これと同じく初期エルサレムの教会の長老たちも、キリスト者の群れの世話をする年長の人々であって、使徒たちと共に、ここで取り上げられている異邦人キリスト者の教会への受け入れ方のような難題の協議にも関わったものと思われる。

一世紀のローマ帝国においては、ユダヤ教は“認可された宗教 (religio licita)”でありました。福音書と使徒言行録の著者であるルカが、キリストと彼に従う人々が「民衆を惑わす者」(ルカ 23:14)でも皇帝に反逆する者でもないことを弁明して、ユダヤ教の一つの“分派”と見なされるべきことを期待した可能性が皆無だとは言えません。しかし、だからと言って、ルカが原始教会の描写を殊更にユダヤ教的に捏造したと疑う必要は全くありません。

新約聖書全体が、原始教会のユダヤ教的性格を証言しています。福音を弁明する場合の教理もユダヤ教的思考の型にそって、ユダヤ教的な用語によっていました。彼らに読まれていた聖書がギリシア語訳の旧約聖書(LXX)であったために、新約聖書のギリシア語もヘブライ語やアラム語の語法の痕跡を含んでいます。典礼文や祈禱文はユダヤ教から借りて来て修正したものが用いられており、教会組織や職制もユダヤ教の会堂に倣ったものでありました。ヘレニズム世界の慣習や、まして当時の密議宗教などに起源するものではなかったことは、注目に値します。

使 15 章におけるエルサレム教会の組織は、当然、ユダヤ教の組織に倣ったものでありました。大祭司と祭司たち、およびレビ人たちが神殿の祭儀を取り仕切っていました。大祭司、学者たち、長老たちからなる最高法院がローマの支配下でもかなりの範囲の行政責任を担っていました。そのように、原始教会の“使徒と長老たち”も、いわば教会の大祭司である主の兄弟ヤコブを議長として、キリスト教の最高法院を形成していたわけです。

しかし実際には、ヤコブは大祭司でも司教でもなくて、ただのエルサレム教会の長老会の議長的な存在であったと推測されます。「柱と目される」(ガラ 2:9)人々の一人として重んじられたとしても、後にカトリック教会において主張されるようになる“ローマの司教の首位権”のようなものを要求し得たわけではありませんでした。

新約聖書にはその他にもいろいろな職制に関する名称が登場しています。フィリポの教会に宛てたパウロの手紙には、「すべての聖なる者たち、ならびに監督(司教)たちと奉仕者(助祭)たちへ」(1:1)という挨拶言葉が使われ、1コリ 12:28 には使徒、預言者、教師、奇跡を行う者、病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者という表があります。これらと、さらに多くの初期のキリスト教文献の研究から導き出される結論は、ある正統な職制形態というものが初めから存在していたのではないということです。前もってナザレのイエスによって定められていた職制などというものがあったわけでもなく、ある特定の職制が主流であって他は地方的なものであったなどという分類も出来ないのです。

初期の教会の職制が、長老制、監督制、会衆制、あるいはカリスマに基づく職制のいずれかであったなどという仮説は、いずれも確かな根拠を見出すことが出来ませんでした。ただ、使徒たちの務めが第一のものであったことだけが、唯一の確かな事実なのです。そして原始教会におけるその他のいろいろな奉仕の役割は、それぞれの地方教会の置かれた状況に応じて「(教会)全体の益となるため」(1コリ 12:7)という、機能的なものでありました。

原始教会の生活の中心はミサ(礼拝)でありました。信者はそこで「御父と御子イエス・キリストとの(生き活きとした)交わり」(ヨハ 1:3)を持ち、主の再臨と終わりの日の裁き、そして全能者である神が王となられる新しい天と新しい地の実現の日(黙 19:6, 21:1)を熱心に待望していたのです。

二世紀末になってカトリック教会が、かつての原始教会が知らなかった使徒継承と聖職位階制度というものを定めるに至ったのは、その時代がこれを必要としたからでありました。

## 4. 初期カトリシズム

使徒信条において私たちが、「聖なる公同(普遍)の教会、聖徒の交わり・・・を信じる」と告白している立場から見ると、一世紀の30年代40年代の教会の自己理解(新しいイスラエル、すなわち終わりの日の共同体)は、はるかにかけ離れたものでありました。教会というものが最初から“秘められた設計図”を与えられていた、つまり後に組織として成立した教会は“その設計図”の忠実な展開であった、あるいは、したがって現代の教会も“その設計図”に常に忠実でなければならない、などと考えるのは非歴史的な空想に過ぎません。教会の組織制度上の発展に神の導きを信じる立場に立って眺めるなら、それは事前に存在した設計図にしたがって建設されたのではなくて、神の権能と時に応じた聖霊の生ける導きの果実、ないし具体化であったことが分かります。

教会に関する基本的な教理の発展は、当然均一にはなく、地方によって早い遅いがあり、また内容も種々であったと考えられます。ただその中で、キリストによって任命された使徒たちの権威は、最初から第一のものとして認められていました。そして職制の発展に寄与した要素の一つは、前講で述べたようにユダヤ人共同体の組織であり、その中には当然、ユダヤ教の会堂における奉仕者の役職が含まれていました。旧約聖書における祭司、レビ人、長老、大祭司その他の役職も考慮されたのはもちろんのことです。

このような要素の重要性を、私たちは新約聖書の記述の中に見出します。使14:23にはパウロとバルナバが「教会ごとに長老たちを任命」したことが書かれ、テト1:5には使徒パウロからテスに「町ごとに長老たちを立てる」指示が記されています。ヘブ13:7で「指導者たち」と呼ばれているのも聖職者のことだと思われます。「祭司」という役職名が出て来ないのは、クリスチャンにとっての唯一の祭司はキリストであるという理解からかも知れません(ヘブ3:1)。

マタ23:8-10で、先生(ラビ)、父、教師と呼ばれてはならないと書かれているのは、前後関係からユダヤ教の律法学者への対抗のように思われます。AD70年のエルサレム滅亡後のユダヤ教再建時代になってから、その仕様が一般的になったこのような役職名の登場は、マタイ福音書の最終的編集時期を推定する一つの材料でもあります。しかしそのことは、ユダヤ教の会堂の組織が及ぼした初期カトリシズムへの影響の大きさをも示しています。

パレスチナのユダヤ人キリスト教会において、カリスマ的指導者が主要な職制の構成要素であったと推論する根拠はなく、むしろその最初の職制はユダヤ教の会堂に倣うものであったというのが正しいと思われれます。パレスチナ以外の地で、例えばフィリピの教会で「監督(司教)たちと奉仕者(助祭)たち」と呼ばれているのも、恐らくユダヤ人キリスト教会の職制をヘレニズム世界にも援用したものでありましょう。イグナティウス(107年に殉教)の頃には未だ地方ごとの司教たちの下で結束していた教会が、やがてその数の増大によって次第により広範囲の教会グループが一人の司教に従属する形に変遷して行くのは自然なことでありました。ただその過程の詳細を述べることは、もはや出来ません。ただすべての地方で均一の経過をたどったのではなかったことだけは確かです。そのようにして二世紀の中頃には、ほぼ職制の形が定まって来て、後のカトリック教会における聖職位階制度へと着実に発展して行ったことは明らかです。

教会の礼拝形式も、同様にユダヤ教の会堂(滅亡以前のエルサレム神殿ではなくて)に倣うものから出発したと考えられます。一般のユダヤ人が旧約聖書に通じていたのは、安息日に会堂での朗読を聞くことによつてであったように、クリスチャンたちも同様でありました。教会で朗読されたのは、決して旧約聖書の中の“メシア預言”と理解されていた箇所限定されていた訳ではありませんから、初期の説教者たちがさらに新しい独創的な旧約聖書解釈を発見していったであろうことは当然です。1コリ10:1-13は、そのような解釈の一例であります。詩編 - キリスト教的再解釈を加えた - が大いに歌われるという教会の習慣も、明らかにこのような初期の礼拝に起源することなのです。その上、ルカ1~2章にある賛歌や、黙示録の中の数々の賛美なども、ユダヤ教の創作詩編の伝統に倣うものであって、パウロの言う「詩編と賛歌と霊的な歌」(エフェ5:19)も、そのようなものを指していたと思われます。

## 5. ユーカリスト(聖餐)の起源

先に述べたように、一世紀の使徒時代の教会というものを、あたかも新約聖書に基づく均一で定型化された組織であったかのように空想することが間違っているように、当時の礼拝や集会の姿を聖書によって明確に定義出来ると思えることも正しくありません。

通常、ユーカリスト(聖餐)について語る場合には、新約聖書の最後の晩餐の記事、特にその制定の言葉の解釈から始めるのが普通です。それは四つあって、マタ 26:26-28、マコ 14:22-24、ルカ 22:19-20、そして 1コリ 11:23-25 のパウロのもので、それらの中でパウロの記述が最も早く(AD.55 年頃)、マルコの記述に十数年先立つと考えられますが、結論から言うと両者とも共通の、原始パレスチナ教会の伝承に由来しているものなのです。「わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです」(1コリ 11:23)とパウロが言った“主”を、歴史上のイエスではなくて、原始教団の伝承の真の担い手である“神の右に上げられた主”の意味に理解すべきことは、すでに何度も私が説明して来た通りです。

そして実際にはこれらの最後の晩餐の記事が先ずあって、それに基づいてユーカリストが守られるようになったのではなくて、すでに原始教団が早くから守っていた共同体の祭儀の起源を説明するために、後から“制定の言葉”の伝承が生まれたのです。

そのようなわけで、これらの伝承は原始教団の祭儀に役立つためという方向性を持って伝えられたのであって、その目的は受難前夜の出来事の忠実な歴史的検証記事を書くことではありませんでした。旧約聖書の創造の物語りの中の多くの神話のように、新約聖書におけるユーカリストの制定の言葉も“原因物語り(etiology)的性格”を帯びているものなのです。それは高度に神学的な“解釈”です。

純粋に歴史学者としての立場から、ユーカリストの起源は？、イエスは最後の晩餐で正確にはなんと叫んだのか？、そしてその言葉の本来の意味は何であったのか？、などということの研究したとしても、結論を得ることは不可能です。一般論として、宗教というものは“解釈”を土台としているものであり、その性質上祭儀そのものや典礼文もみな“より豊かになる”方向性を持っていることを考慮すべきでしょう。

最後の晩餐の物語りがユーカリストを念頭に書かれているように、ヨハネ福音書では 6 章の五千人に食べ物を与えた物語りが書かれました。ヨハネには最後の晩餐の記述はないけれども、明らかにユーカリストの“原因物語り”は存在するのです。

原始教団の祭儀におけるユーカリストの最も重要な意味は、キリストとの、そして信者相互の、一致と交わりでありました(1コリ 10:16-17、1ヨハ 1:3)。「キリストの血に(体にあずかる」とは、永遠の命に至る「命のパン」が意味するもの、渡される前夜の二階の広間におけるイエスの言葉が意味していたものを、指し示し強調することでありました。

新約聖書に散見する「集会での食事」(使 2:46、1コリ 11:21)や「パンを裂く」(使 2:42,46)と呼ばれているものがすべて、後の時代の典礼としてのユーカリストに該当すると考えるべきではありませんし、さらにその上、初期の諸教会におけるユーカリストがすべて同じ形、同じ一つの出来事の記念という形式をとっていたと推定することも正しくありません。さらに諸教会におけるユーカリストの理解にも、その重点の置き方に、多様な解釈があったことは事実です。パウロはこれを「主が来られるときまで、主の死を告げ知らせる」(1コリ 11:26)ことであると言い、ヨハネ福音書は“永遠の命に至るキリストの肉と血を食する交わり”(ヨハ 6 章)として理解しています。さらに他のところでは、これを「新しい契約」(ルカ 22:20)、「新しい過越祭」(1コリ 5:7-8)として説明しています。

いずれにせよ教会は、このユーカリストを通して体験する信仰と愛における一致を大切に、我々はクリスチャンであるという確信を保ったのでした。当時の世界に急速に増え広がる個々の教会において、直ちに“パンを裂くことと祈ること - ユーカリストを含む典礼 -”が主の日(黙 1:10)に守られるようになって行ったことを、その後の歴史は示しています。

時代が進むと典礼(ミサと呼ばれるようになる)の理解はやがて、最後の晩餐と主の受難の記念に加えて、その復活の栄光に与ること(ロマ 8:11)を強調するようになります。ミサにおいて秘跡的に再現される十字架上のいけにえと新しい契約の記念によって、歴史の教会は自らが「神の(国の)相続人」(ロマ 8:17)であることを、繰り返し再確認して来ました。ミサをささげる信者一人一人は、“天の聖所でただ一度成し遂げられた永遠の贖い”(ヘブ 9:12)に一つに結ばれるからです。

このような教会の“生きた体験的な信仰の遺産”への理解を持つことなく、聖書から機械的に読み取った記述に基づいて現代人が、“これが本来の方式だ”“これが正しい聖餐の意味だ”などと新奇な主張をすることは、ただの懐古趣味にしか過ぎません。聖書は、やがて組織としてのカトリック教会誕生に至る、その起源と初期の成長の姿を記録しているのであって、決して現代の教会にそのまま適用可能なレシピ、あるいは設計図ではないのです。